

道を走る者たちへ

A Riders Odyssey 2010
Local Spirits

【聖地発・戦いの記録】

そのライディングスタイルや語りだされてきた生き様からだろうか。とんでもない跳ねっ返りだと噂されていた現代に生きる女騎士。彼女の放つ独特のオーラは、戦いの歴史であり鋼のような精神力のせいなのか。疾走することで自らを保つことができるという彼女は、愛すべき道を守るための戦いを始めた。

伊豆スカジャンヌダルク

蒼薔薇ヘイントの黒Fを見た……その目撃情報は、伊豆のワインディングロードを愛する者たちの間でちょっとしたニュースとなった。さらに小柄ながら走りはかなりアグレッシブであると。その黒F乗りは彼女に違いない！ Bettyのカンバンを背負いし者。噂や目撃情報が数多く寄せられるようになった一昨年の初秋、彼女は我々の前に姿を現した。予想どおり蒼薔薇号を駆る彼女は、雑誌で見たことのあるBettyであった。てっきり東京から遠征にきているのかと思っていたが、聞けば地元在住で我々とは走るタイミングがたまたまズレていただけだという。ニカッと屈託のない笑顔を見せる彼女。だがそれ以上に我々の興味を惹きつけたのは、年月を重ねてきたであろうスバルタンな錯覚である。レザーのベスト、革ジャン、チャップス。そのヤレ方が走りの歴史を物語っていた。

彼女に本当の意味で疾るバイク乗りの匂いを感じた我々は、それを確認する意味でランデブーとしゃれ込んでみる。ガバーツと大股を開き猫背スタイルで蒼薔薇号を駆る彼女。華麗にして豪快なモットーとしているそうだが、攻めどころと引き際をわきまえた思い切りの良い走り。我々は舌を巻いた。いわゆる絶版車ブームに乗っかり黒Fを選んだだけの女性ライダーではないかと確信する。公道という名の戦場において、闘って闘って、戦い抜いてきた孤高の戦士。我々の山仲間として迎え入れることに、誰ひとり異論はなかった。

CB750F' Betty' Lunatic Dan cer' etc……聞いてみたことは山ほどあった。だがプライベートも含め、彼女自身が語りたくなるのを待った。我々もそうなのだが、お互いの過去やプライベートを詮索することはない。ただ単に伊豆のワインディングロードが好きで、タイミング良く集まった時に楽しく走ればそれで良い。多くを語らずともその走りを見れば、どれだけの経験があるのかわかるからだ。恋愛関係にも言えることだが、お互いに多少の秘密を



Betty#1 (ベティ1号)
静岡県在住。公務員。ホンダ車ばかり数台乗り継ぎ、15年前からCB750F。ホームコースとも言える伊豆スカジャンの状況に危機感を抱き、昨年より地元在住のライダー・カズ中西氏と共に、伊豆スカをはじめとした地元ワインディングロードを守る戦いを始めた。

持っている方が魅力的であり長く続く。ただしCBFについては「バリバリ伝説の巨摩ケンに憧れてね」と語ってくれた。まるで手足のように黒Fを乗りこなしたいとも。そして彼女の心をときめかせるF19インチのナナハンカタナを駆る男に出会ったことがないと、照れながら笑った。

山仲間とすつかり打ち解け、週末ごとに走りを楽しむようになった彼女。世間的に見れば、我々はいわゆる山の常連である。だが、何れも往復したり一般観光客に迷惑をかけるような行為は慎んでいる。山に上ってきて仲間と落ち合い、その時のノリが良ければ別の場所へ走り

に行き、そうでないときは夕方まで語り合うこともある。そんな楽しげな雰囲気。に誘われるかのように話しかけてくるバイク乗りは少なくない。しかしながら、すぐに我々の仲間となるわけではなく、同じように伊豆のワインディングロードを愛し、楽しく走れる者であるか否かの線引きがある。思いつくせは、彼女は以前こんなことを言っていた。「女だとかわかってやたらにつっかかってくる者が多い。男のように乗りこなせないだろう？」と言わんばかりの上から目線。そういう輩に限って口だけ国際A級だね。すごくカッコ悪いの。だからワタシはそんな輩に負けないよう腕を磨いてきたつもりだし、これからも変わらないよ」



カズ中西=文
text by Kaz Nakanishi
増井貴光=写真
photo by Taka Masui